

石田 憲著

『日独伊三国同盟の起源』

——イタリア・日本から見た枢軸外交——

(講談社選書メチエ 552)

講談社 二〇一三・六刊

四六 二五四頁 一六〇〇円

本書は、イタリアと日本の外務省に注目し、枢軸から同盟へと向かう対外政策の形成過程を描き出したものである。等身大の職業外交官の軌跡とともに、イデオロギー、政治体制と構造の特徴が浮き彫りとなっていく。

一九三〇年代、ナチス・ドイツ、ファシズム・イタリア、日本の三国は、自分たちを「もたざる国」であると称し、イギリスをはじめとする「もてる国」に対抗して、領土の再分割を要求した。三国は、反共主義と反自由主義、修正主義、反国際連盟というイデオロギーを共有し、「新地中海帝国」、「大東亜共栄圏」、「東方生存圏」の建設を掲げる。そもそも三国間の共通権益が希薄であったことから、相互の不信と偏見、独断的な行動が多かった。インドへの道にあたる地中海ではイタリア、アジアでは日本、そして対岸の大陸ではドイツというように、三つの脅威に直面していたのがイギリスであった。これまでの研究においても、三国間の齟齬と懸隔、内部抗争、対英交渉が破綻した末の「不承不承の同盟」だったことが指摘されてきた。

本書はさらに踏み込み、三国の共通点と類似点、結合点に考察が及んでいる。三国間には対立と相違があり、対英交渉から枢軸離反をはかろうとした「にもかかわらず」以降の文脈の分析に力点を置いている。なぜ三国は結合したのか、この問いに答えるための鍵となるのが政策イメージである。著者は、カウンター・イメージ、パラレル・イメージ、ミラー・イメージに類型化し、イデオロギー、現実主義、政策決定過程にこのイメージを対応させて考察している。枢軸国は、一九三七年を通じて国際連盟への対抗イデオロギーを顕在化させ（カウンター・イメージ）、膨張の目的と方法が過激化し、三国間で軍事行動の連鎖が起こり（パラレル・イメージ）、自国内の対立をイギリス政府に投影させて（ミラー・イメージ）、イギリスの宥和を期待した。日本とイタリアに共通するのは、君主、首相、外相、外務省、軍と連なる権力構造が閉鎖的であり、行動主体の相互間で抑制と均衡が保てなくなったことである。そのため政策の形成が場当たりの、突発的になり、膨張のエスカレートとともに構造自体が破綻し、枢軸同盟化を抑制する機能を失った。

枢軸外交に関する日本の先行研究では、イタリアのプレゼンスは過小評価されてきた、もしくは日独関係によって覆い隠されてきたという感がある。対英関係も枢軸外交を論じる上で必要不可欠な要素となるが、やはり付随的な記述に留まることが多かった。研究状況がバランスを欠いている中で、イタリアと対英関係という視点を中心として枢軸外交を描き出した本書の意義は大きく、方法論についても革新を試みている。

「戦士のファッション」が台頭した時代、社会に蔓延していた閉塞感と世代間の懸隔は、我々が直面している問題でもある。「強いリーダー」と「決められる政治」を待望する世論も記憶に新しい。問題を為政者個人に還元するのではなく、「強いリーダー」を支持する側、「決められる政治」によって閉塞感を打ち破り、自分たちの満たされない思いを解消しようとする構造に目を向けなければいけない。本書には、当時のファッション体制の中に今日の政治的課題を逆照射しようという著者の意図が込められている。

(中村綾乃)